

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院・教 育委員会等	実施機関名・連携機関名 国立大学法人福井大学大学院福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学 連合教職開発研究科 岐阜聖 徳学園大学
コラボ研修プログラム	事業名：【NITS・福井大学連合教職大学院コラボ研修】 「探究的な学び」を探究する新たな「児童・生徒と教師の学び」を支えるコミュニティの展開Ⅲ（継続企画）
支援事業報告書	研修等名：【NITS・福井大学連合教職大学院コラボ研修】「探究的な学び」を探究する新たな「児童・生徒と教 師の学び」を支えるコミュニティの展開Ⅲ（継続企画） 主タイトル及び副タイトル：実践し省察するコミュニティ「探究的な学びを実現する教師」「教師を支える教職大学 院」「教師の実践力を培う学校拠点の実践研究」「学校と大学/ 実践と研究を結ぶ新しい実践研究組織とその ネットワーク」 開催日時：2025 年 1 月 25 日（土） 午前 10 時～午後 3 時 30 分 開催場所：岐阜聖徳学園大学（岐阜県岐阜市柳津町一丁目 1 番地） 参加人数（総数 99 人）：教育委員会 9 人、小・中学校管理職 12 人、幼稚園教員 2 人、小学校教員 8 人、中学校教員 7 人、義務教育教員 7 人、高校教員 3 人、大学教員等 15 人、中学生 9 人、高校生 3 人、大学生及び大学院生 24 人

目的：

本研修の目的は、①令和の日本型学校教育において求められている、学習者中心の探究的・協働的な学
びを具体的に展開することができる教師の力量形成に向けて、教師自身が様々な人と関わり合いながら「主体
的、対話的で深い学び」の在り方を考える実体験の機会を提供すること、②継続企画第 3 回目として、今研
修企画では、実践報告対象を幼稚園にまで広げ、探究的で協働的な学びが、幼児教育から高等教育に至
るまで共通する学びの本質であることを明らかにすることである。

内容：※全体発表の内容をテープ起こしするなど、具体的に記載してください。

1. 教育改革フォーラム（午前の報告会）

（報告 1）岐阜市立加納幼稚園 園長 藤井佐由美「探究心と想像力を育む幼児教育の実践」

幼児教育の特徴として、5 領域を遊びや生活を通して総合的に学ぶこと、即ち「遊びそのものが学び」である
ことを、具体的な活動を紹介しながら解説した。子どもが遊びや生活を通して、様々な事象と主体的に関わる
ことで、生涯にわたる探究心と自己肯定感の基盤を育むという、幼児教育の重要性が明瞭に示された。

（報告 2）大垣市立上石津学園 校長 神谷憲一『「新たな学び」と『探究的な学び』への挑戦』

小学校 4 校と中学校 1 校を統合した義務教育学校の構想から創設の過程、および探究的な学びの実現
までの歩みが紹介された。9 年間での学級担任制から教科担任制への計画的な移行、総合的な学習の時
間を活用する探究的な学び（「自ら考え、活動し続ける活動」）、異年齢集団による交流と学びの効果な
ど、義務教育学校の特色を最大限に生かした実践が披露された。少子化・過疎化に対して、学校教育がど
のように地域と手を取り合いながら立ち向かい、探究的な学びを通して、防災など現代の社会の課題を解決
していく人材を育てることができるのか、今日の学校教育の課題に対して大きな希望を与える報告であった。

（報告 3）福井大学教職大学院 教授 清川亨「高校生の学び・探究について」

高校生にとっての探究的な学びについて、「主体性」が鍵であることを、高志高校を始め福井県の高校の事
例を交えて論じた。①主体的学習を身につけ他者と交流することにより、個々が自己に見合った成長を感じる
ことが探究活動の基盤となること、②その学びを支援する概念と組織づくりが教育に求められていること、③教
育の目的は社会の変化に対応し、持続可能な社会を担う人材を育成することであること、④そのために教員
が自ら探究とは何かについて批判的に考え、自ら探究を実践することが重要であるとし全体をまとめた。

（指導・講話）岐阜県教育委員会義務教育総括監 青木 孝憲（プログラムから順番変更）

現代の急速な変化に積極的に向き合い、他者と協働して解決する力、情報を見極め再構築する探究的
な見方・考え方の意義と、その基盤となる横断的・総合的な学習の重要性が示された。探究的な学びでは一
つの見方が支配する「正解主義」に陥るのではなく、個別の、そして多様な状況に対話的に関わっていくことが
求められる。このような学びにより個人と社会全体の幸福な未来が築かれると結んだ。

（コメント）福井大学教職大学院 教授 木村優

先立つ 3 つの報告には共通する教育理念が基本にあるとした。それは現代の社会と環境の変化がもたらす予
想困難な課題に立ち向かい解決する力を、探究的かつ協働的な学びを通して育むことである。またそのような
学びを支える、教員間及び校種・組織間の多重的なコミュニティ形成の重要性が述べられた。

2. ラウンドテーブル（午後、16 グループ）

今回の研修では、幼稚園から大学院に至るまでの管理職・教員、教育委員会職員、中学・高校・大学（院）生と、多様な立場の人々が参加し活発かつ和やかな語り合いが行われた（アンケート参照）。

成果：※参加者の声など客観的な情報・データとともに記載して下さい。

アンケート（4 件法）と自由記述の集計結果から、午前・午後とも探究的な学びについて理解が深まり、更に学校種を超えて共に語り合いたいという意欲が明確になった（有効回答数午前 46 名・午後 55 名）。

（1）午前の報告会 「幼稚園と学校のつながりの理解が深まったか」 とても深まった 85%
「更に学びたいか」 とても学びたい 93%

コメント抜粋「幼稚園の実践に学びの礎を見た。そのような学びをした園児の可能性を小中学校で潰してはならないと思った。」「育ちの連続性を確保するには、校種を超えた対話が大事なのだと感じました。

（2）午後のラウンドテーブル「様々な人と話し合いができたか」 とてもできた 83%
「さらに共に語り合いたいと思ったか」 とても思った 85%

コメント抜粋「経験年数や役職などに関係なく、目的や熱意のある人たちとの対話には、学びや気づきがたくさんある事を改めて感じた。職員室の中にも、今日のような対話があればと感じた。」

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

「共通言語」①「研修デザインの三角形」について、1）子ども自ら関心を持ち主体的学ぶ姿が学びの基本であり、それは、2）幼時から高校に至るまで通底する探究的な学びであること、3）また2）の内容を、事例報告とラウンドテーブルを通じた語り合いにより深められる参加者の姿が確認できた。「共通言語」②「研修目標の3要素」については、午前・午後のプログラムを通して1.「新しく知る」、2.「自らの気づき」、3.「自己の「あり方」」についての気づき」が段階的に深まっていった。更に午後のラウンドテーブルを通して、様々な校種、経験、立場の教育従事者との対話を通じてこれらの「気づき」が、開放的な雰囲気の中で醸成されていた。（「共通言語」③「豊かな気づきが醸成される学び」及び④「探究型研修」に関連する）。本研修プログラムを通じて幼稚園から大学に至るまでの「共通言語」⑤「学び合いのコミュニティ」の基盤が岐阜にも形成された。

アイデアや工夫したこと：※実際の様子がより分かるよう、必要に応じて写真や図を用いて説明してください。

午前の事例報告と午後のラウンドテーブルを通して、「新しく知る」、「自らの気づき」、「自己の「あり方」」についての気づき」が、段階的に深まっていくプロセスを設計した。



午前の部：教育改革フォーラム風景

幼稚園、義務教育学校、高校に至るまでの実践報告に続き、指導・講話により現代の教育の課題をまとめ、幼児教育から3つの教育段階における子どもの主体的で協働的な学びの在り方が系統的に理解できるようにした。

さらにそれらの情報を総括するコメントにより、校種を超えた探究的な学びの意義、及び学びを支える重層的なコミュニティ形成の重要性が理解されやすい構成とした。



午後の部のラウンドテーブル風景

本継続企画においては、最も多様な校種・立場の人々が参加した。福井県・岐阜県の経験豊かな教職員をファシリテーターとして各テーブルに配置し、和やかな雰囲気の中で、参加者同士が自由に語り合い豊かな気づきが醸成されるひと時の創出に務めた。また、それぞれのテーブルの実践報告者2人について、教員と生徒・学生（大学院生）を組み合わせ、聞き手についても可能な限り異なる校種と立場の人々を配置して各テーブルを構成することで、多層的なコミュニティの形成を目指した。